

《シンポジウム》

2011 年度シンポジウムおよび特別報告について

司会 水落健治

1. 2011 年度シンポジウムは、松崎一平氏（富山大学）、周藤多紀氏（山口大学）、中村秀樹氏（上智大学）がそれぞれ提題を行い、その後、フロアからの質問を受け付けるという形で行われた。今回は、ここ数年来恒例となっている特定質問者を立てることはしなかったが、各提題相互の内容とフロアからの質問がよく絡み合い、教父時代から 12 世紀に至るプラトニズムのひとつの相が浮き彫りにされるとともに、当該テーマにおける今後の研究課題も幾つか明らかにされたように思う。また企画チームのひとりである山内志朗氏（慶應義塾大学）による特別報告では、12 世紀までの超越概念 *transcendentalia* が、その後イスラム世界からのインパクトを受けつつさらに展開して行く際に現れるプラトニズムの影が示された。以下、フロアからの質問をも含めて、シンポジウムおよび特別報告で明らかになったことを再現してみようと思う。

2. 松崎一平氏の提題「アウグスティヌスとプラトニズム」では、アウグスティヌス『告白』の記述を中心的テキストとし、それに初期著作である『ソリロキア』および後期著作である『神の国』を補完的に用いながら、19 歳のアウグスティヌスを捉えた哲学的探求がいかなるものであるかが明らかにされた。アウグスティヌスは 19 歳の時、キケロの『ホルテンシウス』を読み「知恵そのもの」に向かって心を燃え上がらせるが、この「知恵への愛」*amor sapientiae* には当初から一貫して二つの層があった。——（1）不死の知恵を求める知的な営みの層、および（2）それを実現するために世俗的な欲望を制御しようとする生活上の努力、である。松崎氏はこのことを、回心直後に執筆された『ソリロキア』の中で世俗的な欲望の制御の問題が自覚的に取り上げられていること、後期著作である

『神の国』の中で「知恵への熱意は行為と観想において展開される」との記述があり、「プラトンはこれら二部門を結びつけて哲学を完成した」と述べられていることの内に見ている。

この提題に対して、フロアからは三つの質問・意見が寄せられた。

1. アウグスティヌスにおけるプラトニズムの要点は「愛知のための節制の勧め」にあったと言えるのであろうか。松崎氏は『告白』6.11.18の引用の際、アカデメイアの人々の不可知論への言及箇所を省略しているが、その意図はどこにあるのか。
2. アウグスティヌスの『ホルテンシウス』を契機とする「知恵探求」は彼がプロティノスの著作に会う以前の出来事である。それにもかかわらず、この「知恵探求」がプラトンのと言われる根拠はどこにあるのか。
3. 松崎氏の提題に従うなら、中世の「修道的生における観想」の伝統は、「ソクラテス-プラトンの哲学的な生の追求」がアウグスティヌスを経由して中世に至ったもの、と理解されることになるのではないか。

これらの問題をめぐるやりとりの中で明確な解答や方向性は示されなかったが、問題の所在が浮き彫りにされたといえよう。

3. 周藤多紀氏の提題「ボエティウスのプラトニズム——アリストテレス註解の視点から——」では、プラトン主義者でありながらアリストテレス註解書をも執筆したボエティウスがいかなる意味でプラトン主義者であるかが示された。まず周藤氏は、ボエティウスの著作中で『哲学の慰め』においてはプラトン主義の色彩が濃いものの、論理学関係著作ではプラトンから距離をとっていること、それにもかかわらずボエティウスがポルピュリオスの影響のもとにあることを指摘する。そして、ボエティウスが「プラトンとアリストテレスは多くの重大な哲学的問題において一致するだろう」との見通しを示している点に注目し、両者の一致を二つの局面において確認してゆく。第一の局面は、論理学的著作において「派生語」や「条件文」の問題を論じる箇所であり、これらの記述にはプラトンの「分有」の形而上学が透けて見えるという。そしてボエティウスはこの考え方をポルピュリオスから学んだとされる。また第二の局面は、ポルピュリオス的な考え方を拒絶し「一」への執着を表明する箇所、ボエティウ

スはこの箇所ではピュタゴラス派の学説に通じていたイアンブリコスに依拠していたとされる。かくしてボエティウスは「プラトン主義者の頭、アリストテレス主義者の胴体、ストア派の尻尾をもつキメラ」ではあるにしても、彼のプラトン主義者としての頭——特にイアンブリコスに依拠する部分——は比較的小さい、と結論されるのである。

この提題に対して、フロアからは次のような質問が提起された。

1. ボエティウスが展開している条件文を用いた「仮言的推論」の内容はどのようなものか。
2. 『哲学の慰め』等の著作とアリストテレス註解などの論理的著作を同等に論じてよいのか。
3. ボエティウスの著作において、プラトンとアリストテレスが区別して論じられるのではなく、重なり合って論じられている箇所はないのか。

これらの質問のうち3. に対して、周藤氏からは「プラトン主義的な『哲学の慰め』において『ニコマコス倫理学』の影響が指摘されている」との解答があり、倫理学において両者が重なり合っている可能性が指摘された。

4. 中村秀樹氏の提題「12世紀のプラトニズム——キリスト教神学の自己確認とプラトニズム——」では、ビザンツ、イスラム、ユダヤ文化との交渉が深まった12世紀という時代において特に重要なサン・ヴィクトール学派が取り上げられた。サン・ヴィクトール学派は、「西方キリスト教が伝統との関わりの中で自己のあり方の問い直しを迫られる」という時代的要請の中で、ディオニュシオス・アレオバギテースの著作の研究を通じて「形而上学的覚醒」に至り、新たな自然理解の可能性に導かれた。だが、サン・ヴィクトールのフーゴーらは、この可能性をプラトンの『ティマイオス』の視点からではなく、『創世記』の視点から展開する。愛知の対象たる「純粹な知恵」はヨハネ福音書プロロゴスの「人を照らす光」から捉えられ、「汝自身を知れ」というソクラテス的モチーフは、アウグスティヌスの「自己探求を媒介としての神への道」との関連で捉えられる。また「観想」は「主の変容の山」(マタ17:1-13)との関連で、「脱我」は「認識を超えた神との愛による合一」としてディオニュシオスの言語によって捉えられる。かくしてサン・ヴィクトール学派は、プラトニズムを「キリスト教信仰の側から」批判的に吟味することになった。

中村氏の提題の前提となっている立場「中世のプラトニズムの本質を突き止めるためには、思想全体の背景であった神学的視点から考察することが必要である」に対して、フロアからは「そのアプローチはどこにまで及ぶべきか」という質問が寄せられた。中村氏からは「研究対象の原典が神学的コンテクストに置かれている限り、まず神学的検討を行ってから、可能性に応じて哲学的・文学的評価などをすべきである」との解答が与えられた。」

5. 最後に、山内志朗氏の特別報告「中世存在論におけるプラトニズムと超越概念」に触れておく。13世紀に展開されることになる「超越概念」transcendentalia は、12世紀には〈存在〉、〈一〉、〈真〉、〈善〉の四つであった。だが次の時期になると、アヴィセンナの存在論が受容され、超越概念に〈もの〉と〈或るもの〉とが付加されることになる。しかるに、イスラム哲学における〈もの〉は、現実的な存在者のみならず、可能的な存在者 (e.g. フェニックス) をも含む。これは、創造における神の「あれ！」という命令を受容して存在へと変容する対象、つまり「無」をも含む広い概念なのである。かくして、かかる〈もの〉は「普遍」とされる一方、神の世界創造における「範型因」exemplar とされることになる。神は全能であるから、現実には存在しない「フェニックス」のような存在をも創造することが可能である。そしてその際に範型として用いられるのが〈もの〉なのである。このような範型因としての〈もの〉概念を自覚的に導入したのはガンのヘンリクスが最初であるが、かかるプラトンの範型因の導入は、結果的にアウグスティヌスへの回帰をもたらすことになった。かくして山内氏は結論する——中世哲学の課題はアリストテレスを継承しそれを越えることであったが、アリストテレス的な枠組みが拡張されようとするとき、非アリストテレス的なもの・プラトニズム的なものが現れてくる。

6. 以上の提題とそれに関わる質疑応答、また特別報告を見るとき、われわれは、教父時代から12世紀に至るプラトニズムの流れを概観することができる。今ごく大雑把にその流れをまとめるならば、それは次のようになるだろう。

1. プラトニズムとアリストテレスの流れ、そしてキリスト教の三者は、——いわゆるアリストテレスの西欧帰還に先立つ時代にあってもその後の時代にあっても——相互に対する影響と反発 (= 自己確認) を繰り返しながら展開して行った。

2. アウグスティヌスにおける知恵の探求は、単なる知的な営みに留まらず、探求のための生活の改善・節制を含むものであった。中世における「修道的生における観想」の伝統は、何らかの仕方でのアウグスティヌス的探求に繋がるものではないか。

この結論は、哲学史の常識とも言えるものであり、格別目新しいものではないが、われわれは、今回のシンポジウムと特別報告を通してその幾つかの局面の詳細を垣間見ることができたことを幸いとしなければならない。

〈提 題〉

アウグスティヌスとプラトニズム

松 崎 一 平

0. はじめに

周知のように、哲学と若きアウグスティヌスとの、劇的といつていい出会い（373年か374年のカルタゴでのできごと）が、『告白』第3巻に回想されている。十九歳の若者は、修辞学のカリキュラムの最終段階で、弁舌をみがく教材としてケクロの『ホルテンシウス』を読んだものの、学ぶべきとされていた修辞の巧みさにはそれほどひかれず、むしろその書物の勧める「知恵への愛」、すなわち哲学的探求へと燃えあがった。そのとき若者のもとにやってきた哲学とはなんだったのか、アウグスティヌスの内的と外的との生の軌跡に照らして考察してみることで、与えられた課題を果たしたい。

1. 『ホルテンシウス』体験とは？——『告白』第3巻第4章7-9節

『ホルテンシウス』との出会いは、以下のように回想されている。